

## 公孫氏政権と司馬懿の遼東遠征

佐藤 佑治

要旨：

司馬懿の遼東遠征が持つ意味を、公孫氏政権の盛衰とからめて考えてみた。この遠征の成功は司馬懿の国盗りの本格的なスタートとなったのではないかと考えられる。これには倭の女王卑弥呼への王号授与がおおきなヒントになっている。

キーワード：

公孫氏政権、遼東地方、司馬懿、卑弥呼

### はじめに

司馬懿の遼東遠征により238年に幕を閉じた公孫氏政権は、公孫度が後漢末期の中平6年(189年)に遼東太守に任命されてより、その子の康・恭、康の子の淵と3世4代の半世紀にわたって遼東地方の軍閥として隠然たる勢力を維持し続けた。

周知の通り後漢末にはあちこちにこうした地方軍閥政権が割拠したのであり、後漢末から西晋の時代は、この群雄割拠の中から、三国鼎立の時代を経て、最終的に司馬氏が勝ちぬいたとまとめることができる。

司馬氏政権の基礎を築いた司馬懿がいつごろから国盗りを本格的に考えたかは難しいところだが<sup>1)</sup>、彼が三国魏朝廷においてなした、後の国盗りにつながる大きな功績の最初は、明帝即位と共に驃騎將軍・督荊予二州諸軍事として国境中部を管轄する軍事要衝である南陽郡宛県に出鎮して、叛服常ない地方軍閥孟達の征伐に成功したことであろう。

この功績で大將軍・大都督に昇進した司馬懿の次なる功績は、都督雍梁二州諸軍事として今度は西の蜀との国境を管轄する軍事要衝である長安に出鎮して、諸葛亮の挑発に乗らず、持久戦に持ち込み蜀の北伐をしのいだ

ことである。

これに続く第三の功績が、今回本稿で取り上げる公孫氏政権打倒である。南・西と転戦し太尉に昇進した司馬懿は、今回は一転して東にむかうことになった。時に司馬懿60才の春であった<sup>2)</sup>。さてそれでは公孫氏政権とはいかなる存在であったのか。まずここから見てみよう。

### 1. 初代公孫度の自立 (189~204年)

公孫度は『三国志』巻8の本伝によれば<sup>3)</sup>、もともと遼東郡襄平県の人であったが、父がお上の目を逃れて玄菟郡に移ったので、そこで郡吏になった。彼の道が開けたのは、玄菟太守の18才で亡くなった子供と同名・同年であったことから太守に奇遇を得たことに始まる。その後、「有道」に挙げられ、尚書郎に除され、ややあって冀州刺史に遷ったが、「謠言」により免ぜられた。董卓の中將郎になっていた同郡の徐栄の推薦で遼東太守になった。時に後漢末期の中平6年(189年)のことであった。本来地方長官には本籍地回避が適用されていたが、王朝末期にはこうした本籍地任用が間々見られる。手っ取り早く地元をまとめさせようと言う王朝側の魂胆であるが、もちろん地方独立政権誕生のおそれと紙一重ではあった。公孫度の場合もやがてその轍を踏むことになる。

しかし彼の地方独立政権づくり(当初から彼が独立を考えていたかどうかは知れない)は最初から順調であったのではない。就任時は、玄菟郡「小吏」出身者ということで軽んぜられたとある。彼は、郡内にあっては往時我が子康を「伍長」とした属国・守襄平令の公孫昭をとらえて襄平の市場で「笞殺」し、以前冷遇した「名豪大姓」田韶ら「百余家」を法にひきかけ誅殺し、また郡外にあっては東は高句麗、西は烏丸を討伐して、郡中・海内に威令をしいた。

中原の混乱する中で、遼東郡から遼西・中遼二郡を分離し、太守を置いたり、対岸の東萊の諸県を収め嘗州刺史を置き、ついに自立して「遼東侯・平州牧」と自称した。これに対し曹操は「武威將軍・永寧郷侯」としたが、彼は「我は遼東に王たり、なんぞ永寧たらんや」といって印綬を武庫にしまってしまったという。

この間遼東には中原の戦乱を避けて、多くの名士が移住してきた。例えば平原郡の王烈、北海郡の炳原・管寧(二人は華歆と一龍と合称された)

などである。とりわけ管寧は37年間にわたって滞在した。古来文化の庇護者をもって任ずるのが中国権力者の伝統であってみれば、彼らの滞在は公孫度の地方独立政権づくりにプラスとして働いたことであろう。

かくして彼は一代にして遼東地方に確固とした政権を築き上げることに成功したのである。彼の政権は死後、子供達に引き継がれる。

## 2. 公孫康と公孫恭の継承(204~228年)

建安9年(204年)長子康が後を継いだ。弟の恭を「永寧郷侯」に封じたが、このことは中原の覇者になりつつあった曹操への一定の配慮ともとれる。建安12年(207年)その曹操に追われて遼東に逃れてきた袁尚・袁熙・遼東烏丸単于速僕丸などを斬って曹操との対決を避けた康は、その功績により「襄平侯・左將軍」となった。

康が亡くなると、子の晃・淵らが幼かったので遼東太守を継いだのは弟の恭であった。220年、魏が建つと恭は「車騎將軍・仮節・平郭侯」に進位し、康には「大司馬」が追贈された。王朝スタ-ト時につきものの大盤振る舞いとは言え、魏の遼東に向ける関心の高さを伺い知ることができる。

しかし恭は「陰消」をわずらい「闇人」となり、統治能力を失ってしまった。太和2年(228年)甥の淵が位を「奪奪」した。

康・恭兄弟の時代は守成の時代といえよう。父の度のような優れた統治手腕はついに発揮されることがなく、中原がもっとも多端であった時の利を最大限に活用して遼東の地方独立政権を守り抜いたのである。

## 3. 公孫淵の盛衰(228~238年)

いよいよ最後の十年間である。淵が位を奪った時、魏の方では明帝が即位したところであった。明帝は淵を揚烈將軍(五品)・遼東太守に任じた。叔父の恭が二品の車騎將軍であり、父が追贈とはいえ一品の大司馬であることを考えあわせると、体制を整えつつあった魏の側の地方独立政権の存在を許さないという意味表示といって良いだろう。

同じ頃、呉では孫権が皇帝を称し、諸葛亮による北伐と連動して、あわよくば天下を伺おうとしていた。遼東の地政学的位置に変動が起こり始める。呉の孫権は魏の後方に位置する公孫淵との連携を模索し、使者を送っ

たのである<sup>4)</sup>。おそらく公孫氏政権は最大の岐路に立たされたといえよう。魏につくべきか、呉につくべきか、一旦は呉につくかに見えた公孫淵は結局、太和7年(233年)呉の使者の首を魏に差し出すことで態度を決めた。明帝はこれを嘉みし「大司馬・楽浪公」とした。厚遇というべきであろう。しかし魏の側の警戒心は飛躍的に高まっていたであろう。つまり今はしばらくは泳がせるが時節が到来したらつぶすとの意思が再度確認されたであろう。

『三国志』本伝および裴松之注ではこの後のやりとりを細かく記している。そこ(特に呉の使者の首を魏に差し出した折の上表文)からは重大な岐路に立たされた公孫淵の悲鳴のようなものが聞こえる。魏はもう一つの東方の叛服常ない高句麗王位宮が呉の使者の首を斬り服属してくると、公孫氏政権への圧力を強めてきた。幽州刺史の田丘儉を派遣し召しだそうとしたのである。ここが最後の思案のしどころであった。公孫淵は戦う道をとった。攻めてきた田丘儉を国境で迎え撃ち退却させたのである。ここまでは思惑通りに事が運んだ。

魏はここで司馬懿を西部戦線から引き抜いて東部戦線に回したのである。明帝の「明」たるゆえんの一つであろう。

#### 4. 司馬懿の遼東遠征

司馬懿の遼東遠征については、中書令の孫資など多くの危惧のなかで遂行された。しかし役者が違うというべきか、公孫氏政権はあっけなくついえさった。多少割り引いて読まねばならぬ『晋書』の記述であるが、歴戦の部下である牛金・胡遵ら4万の歩騎兵は田丘儉の時と同様の布陣・同様の戦法をもくろむ公孫側の裏をかき、主力を南に出ると見せて、北から渡河し、手薄になった本拠地襄平目指して一挙に押し寄せたのである。国境線の守備兵が塹壕から出てあとを追って来るとまずはこの部隊を三戦してうち破り、襄平を囲んだ。

かねて魏の出兵を見込んでいた公孫淵は孫権に救いを求めるが結局間に合わなかった。包囲戦は当初長雨にたたられて軍中や朝廷で撤退論が強くなる中、明帝も司馬懿もまったく動じず、長雨がおさまるや魏軍の総攻撃のなかで降伏を乞うも許されず、かくして襄平は陥落し、逃げ出した公孫淵親子は梁水のほとりて斬られた。こうして半世紀にわたって遼東に覇を

唱えた公孫氏政権は滅亡した。

この作戦に成功した司馬懿の名声が上がったことは容易に推察される。この成功が司馬懿にとっても重要なステップになったことが伺える出来事が起きる。倭の卑弥呼はこれまで公孫氏政権に服属していたが<sup>5)</sup>、この直後「大夫難升米」らを派遣してきた。この使節は初めて都にのぼり、親魏倭王の称号と金印紫綬を授かり、あまたの貴重な回賜の品々(朝貢の粗末な品と対比して)を下されるという破格の厚遇を受けるのである<sup>6)</sup>。この親魏倭王の称号については、すでに西嶋氏も説いたごとく<sup>7)</sup>、太和3年(229年)大月氏王波調に「親魏大月氏王」が授けられただけである。この西のはしにある国の来朝に功績のあったのが司馬懿のライバル、皇族の曹真(231年に死亡)であった。その流れの中でこの親魏倭王の称号授与を考えると、その背後に司馬懿の影を見る。かくしてライバルに追いついた司馬懿は、明帝の死、幼帝の即位の239年にはその前途に国盗りを夢見たのではなからうか。彼の前には、ライバルであった曹真の息子曹爽が多くの取り巻きに守られていたが、老かいな司馬懿の敵にはなりえなかったからである。

おわりに

公孫氏政権と司馬懿の遼東遠征をとりあげてその持つ意味について少し考えてみた。先人の受け売りが多く、発見の少なさは我ながら残念である。今後は残された課題の追究を進めてもう少し形のある論文にしたい。

最後になるが、長くおつきあいいただいた文・永田両先生に感謝をささげてこの論を閉じたい。

注

- 1) 福原啓郎『西晋の武帝 司馬炎』(白帝社 1995年)の88頁参照。
- 2) この戦いの顛末についても1)が参考になる。
- 3) 公孫度については崔国璽「略論公孫度」(『社会科学戦線』1985年5期)参照。  
また公孫氏政権の興亡については西嶋定生「親魏倭王冊封に至る東アジアの情勢 公孫氏政権の興亡を中心として」(井上光貞博士還暦記念会編『古代史論叢』上、吉川弘文館 1978年、後『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会 1983年に所収)が詳しい。

#### 公孫氏政權と司馬懿の遼東遠征

- 4) 黎虎「孫權対遼東的経略」(『北京師範大学学報』社会科学版、1994年5期、後『魏晋南北朝史論』学苑出版社 1999年に所収)と菊池大「孫呉政權の対外政策について 東アジア地域を中心に」(『駿台史学』116号 2002年)参照。
- 5) 『三国志』巻30「東夷伝」に「建安中、公孫康 屯有県以南の荒れ地を分けて帯方郡をつくる。公孫模・張敞らを遣わし遺民を収集せしむ。兵を興し韓・濊を伐つ。旧民ようやく出づ。この後、倭・韓遂に帯方に属す」とある。
- 6) いわゆる「魏志倭人伝」についての書物は汗牛充棟ただならぬものがあるが、ここでは佐伯有清『魏志倭人伝を読む』(上・下)吉川弘文館 2000年をあげるにとどめる。  
なお日中古代の交流史については拙稿「古代日本における中国文化の受容」(関東学院大学比較文化学科編『比較文化をいかに学ぶか』明石書店 2004年に所収)で言及した。
- 7) 3)の西嶋論文参照。